

# 詩集『美以久佐』——室生犀星の戦争詩を読む——

Poetry “MIKUSA” : ——Reading Murou saisei's War-Poems——

MIYAKI, Takako

宮木 孝子

日本語コミュニケーション学科  
非常勤講師

## 抄録：

室生犀星は、昭和三七年、自ら編集した『室生犀星全詩集』において、詩集『美以久佐』の詩をすべて削除した。理由は「戦争雰囲気のある詩」の「心のこもりを見たくない」というものであった。この削除の意味については、既に中野重治、伊藤信吉等によつて述べ尽くされている観があるが、本稿では、その削除された詩をも含め、当時の犀星の周辺を視野に入れ、犀星の戦争詩の特性を考察した。

-The purpose of this paper is to understand the poet's contributions to literature during World War II by rereading and considering “-MIKUSA-”. Moreover, the paper seeks a deeper understanding of the poet's interpretation of the essence of a “war poem.”

キーワード：戦時下の詩人、戦争詩、怒りの抒情、短歌という詩形式

## Abstract :

Murou saisei deleted most of the poems from “-MIKUSA, -published in 1943, during the publication of “-Murou saisei Full Poems-” in 1962.

**Keywords :** a war-time poet, war poem, anger lyricism, Tanka

poetry form

詩集『美以久佐』は、昭和一八年七月十日、千歳書房から刊行された。四六版、一八六頁、装幀は著者である室生犀星による、定価二円のパラフィン紙のカバー付きの本である。詩集の刊行が、既に日本の戦況が悪化をたどり、充分な紙の供給がない時代であったことを、その生成りの無地の表紙に、万葉仮名をもって、墨筆で美以久佐と書いた犀星の文字が印刷されただけの簡素な装幀がよく表している。取められた詩は、詩形式のものが、三一作品、短歌形式のものが、五作品、五八首ある。

室生犀星は、この詩集『美以久佐』の作品を、二十年の後、『室生犀星全詩集』（昭和三七年三月・筑摩書房・以下『全詩集』と表記<sup>註1</sup>）を自ら編集し、取捨選択した結果、詩形式の作品を総て削除した。その結果、『全詩集』に残されたのは、短歌形式の四作品、二十七首のみとなった。その理由を同書の「解題」には、次のごとく述べている。

本集の戦争雰囲気のある詩はこれを悉く除外した。後年の史実に拠るためといふ再考もあったが、詩全集の清潔を慮つたのである。この戦争中は詩も制圧のもとに作られ、今日、これらの詩を削除することは心のにこりを見たくないからである。

この人生最後の詩人による大胆な削除の理由は、詩人本人の「解題」と、昭和四二年から四三年にかけて刊行された新潮社版『室生犀星全集』の「後記」を書いた中野重治の評論以上の説明はないと

する見解が既に一般化しているところである。しかし、戦時下の犀星を知る時、この『美以久佐』の詩群と、後の削除後の詩群の意味を考える必要があると考えるのである。詩人犀星の『全詩集』に残したくなかった「心のにこり」はどのように生まれ、またどのように詩に入り、どのような「心のにこり」として、詩を前にした二十年後の犀星に削除を命じたのか。このことを確認して、極限下の中で、形成された犀星文学の本質を掴みたいと思う。本稿では、その戦争詩形成の時期にある随筆評論や新聞記事などの文献、資料で犀星の戦争に対する思いを探り、詩集『美以久佐』にあった戦争詩、そして、残された詩群（短歌形式）の中にある犀星詩の特性を再考したい。また、犀星が残した「心のにこり」のない、『全詩集』に残された短歌形式の詩には、どのような犀星のいう、『全詩集』にふさわしい「清廉」があるかも、併せて考察したい。それは、犀星が（戦時下）という時局に、どのような意志をもって詩と対峙したかを知ることであり、「制圧された」時代の中で消えなかった犀星の詩精神を探るものとなる。

さて、戦時下の犀星については、繰り返しになるが、室生犀星をよく知る作家中野重治の「戦争の五年間」（昭和四二年五月・新潮社『室生犀星全集』第八巻・後記）によって、述べ尽くされた観があり、また、最晩年の伊藤信吉による『室生犀星 戦争の詩人・避戦の詩人』（二〇〇三年・七月・集英社）がある。両者は若き日より、犀星の近くにあつて、多くの犀星詩集の編集に携わり、その経験を踏まえた、詳細な論究もある。第二次大戦後の文学界は戦前

の国策に同調した文学作品の検証と批判をあらゆる分野で行った。

近年の研究傾向としては、近現代詩の国歌（くにうた）としての系譜や、大衆文化、また、メディアとの関係性において、〈戦争詩〉・〈戦争と文学〉・〈戦争と作家〉が盛んである。ただ、本稿では、詩人、室生犀星の本質に近付こうとの目的から、何より戦時下の室生犀星をよく知る人物である、二人の評論を基に、考察を始めたと思う。なぜなら、大正五年七月、八月に、雑誌『感情』に「抒情小曲集」を発表して以来、犀星詩は、彼の実人生と生活感情からなる独特の詩精神によって形成されていると考えられるからである。

よって、この両者による、詩集『美以久佐』の削除の理由と戦時下の犀星像を把握した後、昭和一三年から『美以久佐』刊行時の昭和一八年七月頃までの、犀星の時局へ対する考えが知られる、随筆、新聞記事等の著述を散見しつつ、『美以久佐』の詩群の理解としたい。

### 一、「戦争雰囲気のある詩」の徹底的削除の理由に対する

#### 中野重治、伊藤信吉の見解

前出、犀星編集の『全詩集』の「解題」の引用部分には、犀星自身が、削除の理由を記しているが、その中にある、「詩全集の清廉」を保つという表現は、「心のにぎり」に対する嫌悪の情と、詩に含まれる〈不純物〉を拒否する潔癖感が見てとれる。

詩に含まれる〈不純物〉とは、この「解題」の文章からみる限

り、「制圧のもとに」つくられたという、詩が生まれる際にあつてはならない状況。つまり、詩人の言葉が何者かによつて、抑圧され、歪められたという、戦時下の時代認識があると同時に、そこから生じた〈不純物〉、つまり、詩的感興以外の意志・感情・表現を内包する言葉からなる詩を指すと考えられる。

そうした「心のにぎり」を中野重治は、前出「戦争の五年間」で、次のように指摘する。

（一九九三年以降の）文学の世界におけるあらゆる種類の突出、転身、逃亡の全図の中で、室生犀星の愚直なとつおいつは真面目そのものだったといふことができる。

そしてそれは犀星詩そのものに対する悲しい裏切りの姿をとつても現れねばならなかった。「マニラ陥落」のなかの数行に——「思うても見よ／我々の祖母が秋の夜長の賃仕事に／ほそい悲しいマニラ麻の紵をつなぎ／それら凡てを搾取したあのマニラ／死んだ多くの祖母よ 母たちよ／あなた方を賃仕事でくるしめた／マニラに日本の旗が翻った……」——ある生々しきで「搾取」の恨みがマニラ占領に外され、国内階級関係の問題が対外侵略に外らさえてしまっている。「すぐれた詩によつて呼びさまされ、慰められることは幸福である。」「詩はあたかも愛あるもの同士がお互ひに交わす美しくつつましい微笑のやうに、正しい理解が生まれてくるのだ。詩人の生まれた天稟の齢にしたがつて、おのおのの本道を極めてにぎりなく歩む

ことによつて總ての眞実が存在する。」——『第二愛の詩集』  
 「自序」冒頭の言葉はここで忘れられてしまつてゐる。そして、それらは、「私はシンガポールが陥落したら、その陥落の詩をかくべく前からのまれてゐて、その日のうちに書きあげなければならなかつた。」のような大きな強制力と結びついていた。この犀星において事実がこうだつたことは、戦争それ自體の非人間性をあけすけに告白するものであろう。『美以久佐』前半を占める戦争詩はもつと別のことをも語つてゐる。作品そのものが、それらが内から發しないので外から作られた事への證據になつてゐるという事實である。( ) 内は宮木記す

ここで、中野は、犀星が戦時下にあつて、その状況を見据えつつ、自らの文学を「真面目」に創作して行つたために、その創作姿勢が結果として詩作品の主題の破綻を来す結果を招いたと指摘した。それは、戦時下の常として、詩人の意志とは関わりなく、責任を果たさなければならぬ現実(「外」と、詩人の内にある詩精神(「内」とが、相反する中で作られたことを指し、『美以久佐』に収められた、詩群の誕生の解説ともいえる。〈不純物〉を抱え込んだ作品そのものが、戦時下の「制圧のもとに」あつた詩人犀星の戦争詩である。作品が内からではなく、外から作られた異常性を指摘している。

一方、伊藤信吉は、その著『室生犀星 戦争の詩人・避戦の詩人』(第三篇 戦争の詩人)(二〇〇三年七月・集英社)の中で、

前出、『全詩集』「解題」をもとに、まず、犀星が、この詩の削除について、「後年の史実に拠るためといふ再考もあつたが」と述べる理由として、この『全集』刊行時(昭和三七年)、戦争小説、戦争詩歌の作者たちを「戦争協力者」と指弾する声が強く、犀星自ら、「全集に敢えてそうした作品を入れたり、削除する状態」があり、「時として、批難や論争があるのを耳にした。」「そこには削除や隠蔽が文学的史実をとその歴史を歪める者という論理があつた」、犀星の「後年の史実」云々とはこうした背景があつたとした上で、

「再考もあつたが」「削除」したところには、やはり作者としての自己責任という気持ちがあつたわけだが、それを彼は一方で「心のこりを見たくないから」とした。この考え方には(文学作品として自分自身が許せない)からという、些少ながらも一種の潔癖感があり、もつと穏やかに言えば(文学的削除)に似通うところがある。だが、「戦争中は詩も制圧のもとに作られ」ということは、事柄そのものに詩人・作家たちの戦争下における身の処し方、生き方の基本的な問題がある。

とし、「戦争詩の(代表的)」詩人として、高村光太郎、室生犀星、三好達治を挙げ、「圧制のもとに」という犀星の戦時下の詩作状況への回顧を、他の詩人も意識したか、と想起し、初期はそうであつたかも知れないが、「しだいに時流の波に馴らされ」、「やがて『制圧』に組み込まれ」た状況の中に、犀星もあつたとする。そこ

に戦時下の犀星自身の「身の処し方、生き方の基本的な問題」にそうした「心のにこり」をもった詩の誕生の原因があるとした。このあたりの見方は、後に「避戦の詩人」という表現にも繋がってくるのだが、中野が戦時下の犀星を戦争という状況下において、その創作態度を「愚直なとつおいつは真面目そのもの」と評した解釈に比し、厳しいものがある。

また、伊藤は、『美以久佐』の削除に対して、何より昭和三十七年三月一〇日刊行という、犀星の死（同年三月二六日）の直前であることに重きを置いて考察する。死を自覚して、文学的人生を省みる覚悟の大事業としての、『全詩集』の編集であったとし、そのため、収録された「既刊詩集二十二冊、未刊作品一冊分」の総ては、犀星自身によって、「はげしく取捨選択」された。その中の『美以久佐』の詩形式作品の全削除は、「詩の純粹性というべきことを、一種（文学の骨）というべき形に突きつめてみせた」もので、「犀星は（死の自覚）において」「自作の（文学的削除）」を行ったと捉えるべきと解説する。

こうした伊藤が述べた『美以久佐』のついでに犀星の削除の動機と心情から考えるに、つまり、戦時下の「文学作品として自分自身が許せない」詩だからという理由だけでない、外側から書かれた詩作品の「心のにこり」に対する意識の排除という、犀星の執念の強さが理解される。死を目前にした時点で『全詩集』を編もうと決意した犀星にあって、この『美以久佐』の詩の削除は、当然な結果であった。削除された詩は生涯を貫く、犀星詩の詩精神あるいは詩

論から逸脱した作品であった。

そして、伊藤は、犀星以上に戦争詩人として名を馳せた高村光太郎の昭和四一年一月刊行の『高村光太郎全詩集』がその戦争詩すべてを収録した理由として、まず、没後十年目の刊行であり、詩人本人の手によるものでないという、違いが大きいと述べる。また、中野が述べたように、戦時下の犀星が書いた「シンガポール陥落」の詩が、高村光太郎もそうであったように、予定されたもの、つまりは、日本軍の計画でシンガポール陥落作戦があり、それは勝利であり得ぬことから、事前に詩人に依頼することが行われていた戦時下の現実を指摘する。犀星のいう「制圧」にはこの予定調和の中で作品を依頼され、作られたことも入るとしている。

さて、先に引用した中野重治の「後記」では、犀星の戦争詩は「犀星詩そのものに對する悲しい裏切りの姿」としてあり、本来あるべき犀星詩の姿として、『第二愛の詩集』『自序』冒頭が引用される。その中に「詩人の齢にしたがつて、おのおのの本道を極めてにこりなく歩むことによつて総ての眞実が存在する。」という言葉が続く。ここに「にこりなく歩む」という犀星の詩人としての人生の指針、犀星詩の基準が示されている。これを併せて考える時、人生最後の犀星自身の『全詩集』の編集において、伊藤信吉のいう（文学的削除）が行われる必然性がさらに明確にされる。

## 二、詩集『美以久佐』の作品成立期間における犀星の 言説の変化

次に、詩集『美以久佐』所収の作品の初出掲載期間前後を中心に、昭和一二年頃から詩集刊行年の昭和一七年七月に至る間の随筆集や新聞に発表した、犀星の戦時下の文学観を伺える文章を時代順にみて行こう。これらの発言に中野重治が指摘した「愚直なまでの」犀星の「真面目」さと、伊藤信吉のいう犀星の「戦時下の身の処し方、生き方」を知ることができよう。それらを踏まえることなく、詩集『美以久佐』の詩の「にぎり」をより深く知ることはできないだろう。伊藤信吉のいう「避戦の詩人」という位置づけの検証にもなろうと考える。

先ず、昭和一二年一〇月『改造』（支那事变号）では、評論「戦争と文学」の中で、昭和二十年までの犀星の戦時下における基本姿勢とも考えられる内容が述べられている。

冒頭に、明治期の日清日露戦争に従軍記者として出向いた国木田独歩、田山花袋、二葉亭四迷をあげ、その文学の名声とともに、今の自分に「戦地に赴いて戦争というものの抜き差しのならぬ精神や、その行われる所から信仰する文明の度合いも能く分かり」「國を愛する気持ちなども今まで判然と分からなかつたものまで能く解り學問以上の學問があつたり、音楽や繪畫や凡ゆるものが其處の恐ろしい光景のなかにまざまざと發見できるのであろう」と、戦場経

験のもたらす恩恵を述べ、ミケランジェロ、ダンテ、トルストイ、バルザックなどを引き合いに、戦争がもつ「背景の深刻さ」が「人類の考へを根本的に革めさせる、一大文学のあらはれ」の契機であり、それは「新しい歴史を日夜つくりつつあるもの」とまでの賛辞を述べている。続けて、「私は戦争を好むわけではない」としつつも、「人間の立派さを歴史の上につづるにしても、避けがたいものとしなければならぬ」としている。また、この時代にある、名がなかなか出ないまま「無用の情熱を持つ青年等も、薄志弱行の文學の安くしてき難きを狙ふよりも、志願して持つて國家のために花の如く散つて了つた方がどれだけ勇敢なわざかも知れない」「藝術の美しい殿堂に遣ふ夢をむさぼることよりも、砲聲殷々の間に埒もなき文學を趁うた日の空しかりしことを思ふべきである」とし、自らも「文學の砦にこもることを得たが」もし若き日、そうしたこともできなかつたら、青春を悲劇に送るしかなかつたとする。さらには、「一步そとに出れば湧くがごとき萬歳の聲々や、張り切つた學國一致の美しい魂を眼で見るとつけて、我々は戦場にあつて一刻も良き文化の遅れるなからんことを、文學の中にあつて鬼神のごとく戦つてゐなければならぬのである」と決意を表している。

この昭和一二年は、七月七日、深夜の盧溝橋で日中の軍隊が衝突し、二八日には華北へ総攻撃を開始し、八月上海事変と続く、日中戦争が拡大する年である。内地では、この評論「戦争と文学」が載つた『改造』一〇月号の二ヶ月ほど前、八月二四日には、閣議において、国民精神総動員実施要綱が決定、九月九日内閣訓令とし

て、「尽忠報告」「挙国一致」「堅忍持久」の三大スローガンが掲げられた。まさに、日本は本格的な（戦時下）に突入する時代であった。この背景を考えれば、犀星の時局への迎合とも言える文章は伊藤のいう「組み込まれ」た犀星の姿がそこにあり、痛々しいまでの中野のいう「愚直さ」で、犀星は、時局を直感的に掴んで、本音と建前を交えて述べるのだ。

この時代の状況下では、一人の文学者として、本来は「従軍して筆硯のつづく限り働きたい」が、従軍作家として、自分は適さないものであるが、文学と戦争について考える時、「事變とか戦争とか震災」には文学悲観説を唱えるものもあるが、むしろ、文学者にとって「深く深く物思ひに耽る時」にもなるとし、この時局を活かし、文学者として、「鬼神のごとく戦つてゐなければならぬ」が、それが文学に携わる「我々銃後の仕事」である規定する。この時期の犀星にとって、後に問題となる外側については、「文學の外側で起こった國家的社會的なことからは、何時の間にか内側に沁み込んで来て、それらが文學の血となり骨となるのが常である」と受け止めようとしている。異論をもつものは、「いまだ文學の深さを知らず、亦文學の恩寵を解せぬ輩の輩」であるとし、「かういう際にはこそ日本文化や文學がないがしろにされぬやうに、戦勝の暁にはそっくり美しい昔のままの文學を育てて置かねばならぬ」と文学者の仕事を力説している。さらには、「恐らく強力な文學の建直しも事行われるであろう」と期待する。当時の犀星が文學に抱いていた小説界（私小説）への不満が、それに続く、犀星の偽らざる文芸時

評ともなっている。この時局が、「今までの文學様式」や、「流行的持腐れの小説の一般的手法や模索方向の行き詰まり」の破壊とならないかと期待し、「私小説」でお茶を濁すような現状の打開、「経験小説、少年時代小説、アパート小説」など、犀星から見ても軽薄極まりない小説や一時的流行におもねた小説を「悉く叩きこはして欲しい」とまで述べている。

いつのまにか、「戦争と文學」の主題から離れ、当時の文壇への犀星の批評となったこの文章だが、「文學の外側」で起こる「國家的社會的なことからは何時の間にか内側に沁み込んで来て、文學の血となり骨となるのが常である」とした時代の現実は、犀星の文芸改革の助けとはならず、形を変えて、その後、文學を仕事とする作家自身に大きな「制圧」として覆い被さって行く。翌年の昭和十三年、七月『新潮』に載った「文學は文學の戦場に」では、前年の「戦争と文學」と同様に、戦場に向いて記録する文学者の方法を自分にない、と同じことを述べているものの、「私の文學だけを益々深くそだてることを忘れないやうにしたい、私が生きて役立つことはこの文學をいつくしむことだけである。」と記した。犀星は、「外側」＝時代背景から、「内側」＝犀星文學の世界をとりわけ、意識し、そこに自らの文學が生き残るための策を模索して行く。

「内側」とは、犀星の内部世界（心理・精神）の限定ではなく、犀星自身が自分の文學として認める、文学作品世界を含んでいよう。この「文學は文學の戦場に」については、昭和十三年の五月一日付消印の書簡が、当時の犀星の時局評論に対する姿勢を伝えてい

る。「新潮」の編集者、樽崎勤に宛てたもので、「国策と文学者の役割」は旨くかけないかもしれません。かういふ問題は苦手です。とにかく何かかきましよう。」とあり、五月二五日付消印には、同者に宛て「今朝四枚ばかり書いたのですがまるで気乗りがせず、書けば誰かにつつかかかって行くやうで、實に危ない気がします。事實、小説は事變とは別に暢氣に存在してゐるし、私自身も心境に渝りなく生活してゐてそれを具さにかいて国策と我々の役割をかうことは失言の累を及ぼしさうです。某々氏らのいきり立った見え透いたことは恥ずかしくて書けません。どうか、こんどだけはお許しをねがひます。メ切りにさいして御迷惑でせうがこんな訣くわでも舟はうごきさうありません。」とある。この『新潮』の原稿依頼の返書に見えるのは、前年の『改造』一〇月に載せた評論「戦争と文学」の後味の悪さであつたらう。この時代の犀星にとつて、「文学の外側」からの影響は實際、感じようもなかつたと言える。とはいへ、時局は動いていた。

一方で、同年、『東京日日新聞』一二月一七日学芸欄「軍國世間」の「戦争と詩歌(上)」には、俳句短歌雑誌では多く戦争詠が掲載され、また歌人俳人も多くが招集されて、戦地の現状を詠むようになったのに比べて、「詩壇ではまだ纏まとまったものはないが、先頃の詩集『従軍』の加藤愛夫氏なども相当な作品であつたが、恐らく突如として未だ現れざる代表的詩集があらはれる」だらうとし、更に詩のほうが、直裁に現地状況を讀むことに適すると述べ、「愛國詩や國民詩も今頃變にこそ、初めてなされるものであつ

て、いまこそ驚嘆すべき戦争詩集に私は出合いたいのである。一本の草も見逃さず、また一すぢの汗をも忘れざるやうな詩人ことごと自分の実力と闘ひながら詠み得たものが表れていいのである」、「従軍文士は作家と詩人とを半分づつに」すれば、「麦と兵隊」を詩で行ひ、詩で表はすやうなものがきつと生まれて来るに違ひないからである。」と結んでいる。

この年四月一日には、国家総動員法が公布され五月五日には施行された。中国大陸への侵行、進軍は進み、九月には従軍作家陸軍部隊(久米正雄・岸田国士・丹羽文雄・林美美子等)が漢口へ、海軍部隊(菊池寛・佐藤春夫・吉屋信子等)による戦場報告が盛んになされた年である。この時期の犀星は、「軍國世間」にあるように、当時の俳壇歌壇の戦争詠草の流行に対する詩壇の遅れに、焦燥感さへもっているように感じる。戦争はまだ、犀星にとつて自身の詩に「にこり」を迫るものではなかつた。こうした犀星の文学に対する姿勢に変化が生ずるのは、昭和一五年の頃である。

昭和一五年は、皇紀二千六百年ということで、一月奉祝芸能祭式典挙行を始め、芸術祭参加の催しが多数おこなわれるが、政局は、一月一四日の阿部内閣の総辞職に始まり内閣の解散が続き、七月には左派系政党が解党に至り、政治、学術、芸術の各分野での戦争批判者の追放、選挙が行われる。七月第二次近衛内閣が成立後、二六日には基本国策要綱が決定され、二七日には、大本営政府連絡会議にて、武力行使も含む、南方進政策方針が決定されて行く。そして、一一月一〇日、紀元二千六百年祝賀行事が挙行された。



同年、『読売新聞』一月九日「小説の興」では、「二千六百年を讀める諸家の氏や歌を詠んで美しいけおどかしの詩句ばかりならべであるのに、私は悲観してしまった。」とあるが、「私は新春とともに併せて感じるものは自分の文章もひっくりかえりて漠然として空虚極まるものである。無際限にひろがった空虚のなかで、私は人のやうに方向が立たず、また方向をたててもそんなものは直ぐ壊れてしまふ状態では、全く空虚の広さの中で生きる外しかたない」「ただ、漠然と手探りをやって茫茫たる方向に従くより外に道がない」「いまは何人の心にもそれがあるのではなからうか。」と、真実を失った言葉への不信感と、不安を繰り返して述べている。当然ながら、このどうしようもない煩悶は、〈戦時下〉において、いよいよ「制圧」が現実のものとなって迫って来たからに他ならない。この現実には在る以上は、そこから、脱することはできない。いよいよ、「文学の外側」が「内側」に浸食し始めたのである。

それでは、犀星はどうすることにしたのか。同年九月刊行の随筆集『此君』（人文書院刊）の「自戒」を読むと現実「外側」（事変下の詩人への国家的社会的制圧）から「内側」を守る自己防衛として、自己の文学精神への認識の基軸をずらすことによって、詩人としてこの〈戦時下〉を生き抜く方便を思いつくに至る。

かかる戦時下にあつては私の心をしめ付けてゐるものは、不思議にも私自身の文學へのしめ付けであり、自戒の厳しさにあることである。かういう事變下にあつて私自身の文學は、ど

う変わりようがなくてもその文學精神にびりつとした今までに見られないものをひと筋打徹したい願ひを持ち、そして私はかういう際にこそ私らしい作品のなかに、選びぬいた美しさや善良さに辿りつきたいのである。

犀星は、「私の心をしめ付けているのもの」は、〈戦時下〉〈事變下〉の「外側」の現実にあるのではなく、「内側」の犀星文學に關わる「私自身の文學へのしめ付け」「自戒の厳しさ」が自分を苦しめていると認識しようとする。現実の状況や他者ではなく、自己のもつ文學意識の有り様に問題をすり替えることで、自身が抜け出せない「空虚」な現実から自分と文學を守ろうとした。しかし、自身の文學作品の中で、今までの「私自身の文學」と「びりつとした」今まででない新しいものとは、そう簡単に融合し、「選び抜いた美しさ」や「善良さ」を生み出せそうにはない。そもそも、問題は自分の中にあるという犀星だが「びりつとした」と表現される今までのない要素などというものは、どう考えても「かかる戦時下」に相應の言葉と考えられるからだ。それは、矛盾と、どうしようもない煩悶を抱えることでもあった。

こうした自己の「内側」を見つけて犀星の戦争詩が形を表した、と言える。「びりつとした今までに見られないものをひと筋打徹」する作品で、「選びぬいた美しさや善良さ」を内包する作品を犀星は生みだそうとするのだ。

こうして犀星は昭和十六年の太平洋戦争開戦の日を迎える。こ

の年は元日より、全国の映画館で、ニュース映画の強制上映がなされ、三月には国家総動員法、改正治安維持法が公布され、六月二五日には大本営政府連絡会議において南方施策促進の下、南部仏印駐在が決まる。南方への進軍が促進される中、一〇月一六日近衛内閣が総辞職し、東条英機内閣が成立。一二月八日真珠湾攻撃。後、英米両国に宣戦の詔書を出し、一二月一二日の閣議にて、支那事変を含め大東亜戦争と戦争の名称を決定する。

昭和一七年二月『新潮』の「詩歌小説」には、戦時下に努めて対応しようとする詩人の姿が見られる。「私は詩はあまり作らないが、何か心にあう應へを現したい望みをこの重大な時に持つてゐた。」と述べ、そうした詩人犀星は、事変詩で有名な高村光太郎を例に出して、次のように批判する。高村光太郎に代表される戦争詩は、「主格は千遍一律の文字を馳駆してそこに議論めいた天上語をつらねるばかり」で、「まことの呼吸づかひや主材の正體が詩の行間に消失してゐる」、「表現の渋滞」がある、と。「我々はこのとげとげしい瓦石のやうな理屈めいた言葉を避けてとほらねばならぬ」続けて、こうした詩は朗読には効果があるが、後になにも残らないとその不備を指摘する。

犀星の目指す戦争詩は、「戦争詩という大きな輪郭にたいして徒らな掛け聲をやめて、内へ深くはいり込んでそれを表現すべき唯一の時代に到達せねばならぬことである。戦争といふもののいのちの別れめや、それがいかにちいさいものに影響してゐること、そして國民生活の呼吸づかひなども挙げられるべき」という。

若い頃から常に羨望と尊敬の眼で凝視していた高村光太郎が、当時、戦争詩の戦陣をきつて活躍することへのライバル意識もあるとみてもよいが、それ以上にこの文章では、犀星の戦争詩、事変詩に欠かせないものが列挙されている。ここには、「戦争詩というおおきな輪郭」つまり「外側の現実」と、「内へ深く入り込んでそれを表現すべき唯一」が「時代に到達」しなければ時代の詩とはいえない、というものだ。その条件を満たす物は、戦争を鼓舞するようなスローガンや、理論武装であつてはならない。それは、いかに韻律が整っていても「まことの呼吸づかひ」が失われている。「戦争といふもののいのちの別れめや」「ちいさいものへの影響」が、詩語として現れ、「國民生活の呼吸づかひ」を表現していることが必要と断言する。この犀星の戦争詩の条件は、この昭和一七年から数えて二〇年後、『全詩集』の自らが著した『愛の詩集』の解説にある、「私が何かの思想といふ至難なものに脅かされなかつたことは、何時も何物かの思想を発見出来ない倖せをち合わせてゐたからであらう。」との犀星の言葉にもそのまま生きている。それは、詩人の生きる姿勢であり、詩論である。観念的な詩、啓蒙的、思想的な詩を排除し、戦争詩の中に何となく、「愛の詩集」にみられる日常生活を水平の視線で捉え、リアリズムが抒情詩の美しさを表現することに通じる。犀星の詩人としての「内部」の姿でもある。結果、そうした詩が当時のささやかな「文学の外側」にたいする、言い換えれば「制圧」への抵抗ともとれる。しかし、これに続く文章を読むに、そうした自身の詩に対する潔癖さを上回って、この時期の犀

星は（戦時下）の時代のなかに溶け込んでいたと言わざるを得ない。

光太郎のような詩を朗読することに難を示した犀星だか、自身の「マニラ陥落」の詩が、翼賛会の主催する武蔵野館において、映画の休憩時になされた照井嬰三による朗読を聞くと、「詩による戦争といふものの響がはるかに音楽などと違った、肺腑を突き刺すような急激の効果のあることを知ったのは、たいへんに時機を得たものであった」と満足する。そして翼賛会が今後、デパート、公会堂、公演などで、国民にむかって、「詩の朗読を随時に催して國といふもの、人のいのちといふものを解いてゆく方針であるが、これは日本建国以来の美しい事業であろう」と大政翼賛会のプロパガンダを賞賛するのだ。こうした自己矛盾を抱えて犀星は、戦争詩、詩を書き続ける。

次の項においては、詩集『美以久佐』の構成を確認し、高村光太郎の事変詩と『美以久佐』に収められた犀星の事変詩「十二月八日」を比べて、具体的に犀星の戦争詩を考察したい。

### 三、『美以久佐』の削除された作品と残された作品

詩集『美以久佐』の詩の中より、犀星の事変詩、戦争詩、そして戦時下の詩の幾つかを取り上げ、その特徴を考察しよう。まず、『美以久佐』の目次を次ぎに示す。

序詞（「勝たせたまへ」と同一）

一、日本の歌　みいくさを詠める 「臣らの歌」／「十二月八日」／「マニラ陥落」／「日本の朝」／「怒濤」／「ふたたびその日」／「遠天」／「シンガポール陥落す」

二、みいくさ　銃後を詠める 「勝たせたまへ」／「日本の歌」／「今年の春」／「夜半の文」／「女性大歌」

三、哀笛集　さげがたきもろもろの哀歌　●「よもすがら」九首↓八首／●「生きのびし人」七首↓五首／「静か居」六首

四、野のものの歌 「歴史の祭典　皇紀二千六百年奉祝日に」／「希望の正體」／「きりぎりす」／「磯濱」／「天才の世界」／「乳緑の古典」／「野に記されたもの」／「乏しき青果をかざりて」／「えにしあらば」／「みみずあはれ」／「野のものの歌」

五、蠅の歌　續野人生計 「僕の庭」／「僕の家」／「市井」／「行春」／「麗日」／「塵労」／「少年行」

六、山ざと　●「生ける鮎」一〇首↓四首

七、哀歌 「街の歌」　九首

八、あらいそ集 ●「乏しき炭火」一七首↓一〇首

右のうち、昭和三八年『室生犀星全詩集』『美以久佐』にのこさ

れた作品を●で記した。また、↓の下が残された作品数である。

残った作品は、総て短歌形式のものであり、詩形式は総て削除され

た。ちなみに、一九五五年八月の岩波文庫『室生犀星自選 室生犀

星詩集』では、『美以久佐』からは、詩形式「麗日」の一作品のみ

が選ばれている。」さて、目次でわかるように、詩集『美以久佐』

の構成は、おおきく二つの世界からなっている。先ず戦争詩（事変

詩）、戦時下の国民を描く、「一、日本の歌 みいくさ詠める」と

「二、みいくさ 銃後を読む」の詩群である。前者、「みいくさを読

む」に、「十二月八日」「マニラ陥落」「シンガポール陥落す」といっ

た直接的に戦争の勝利を含む「戦争詩」と、戦時下の日本臣民の愛

国精神を詠う詩群がある。後者「銃後を詠む」には内地での人々の

戦争勝利の祈りの心や、いわゆる銃後の心得とその気構えを詠って

いる。「外側にある」世界が極めてその目的にあつた表現で、犀星

の詩として詠われている。そして、これら二つの章の詩群の一作品

所収未詳を除くすべてが、昭和十七年一月から次々に発表された戦

時下の詩、戦争詩である。

前章にも引いた室生犀星の戦争詩の理想が実際の戦争詩に活かさ

れているかを、同題名の詩「十二月八日」で、高村光太郎の詩と比

べて、その特徴をつかみたい。

「十二月八日」

室生犀星

「十二月八日」

高村光太郎

何かを言いあらわさうとする者

そして言いあらはせない者

よるこびの大きさに打たれて

そこで凝乎として喜んでゐる者

よるこび過ぎて言葉を失つた瞬間

人ははじめて自分の我欲をなくし

何とかして

偉大な喜びをあらはにしたいとあせる

勝利を自分のものにするのは勿体ない

それを何かで表したい、

何かを作り上げた

繪も彫刻も音楽も

そして文学も勝利にぶら下がる

何かをつくり

何かをゑがき

自分のよるこびを人に示したい。

自分も臣の一人であり

臣のいのちをまもり

記憶せよ、十二月八日。

この日世界の歴史あらたまる。

アングロ・サクソンの主権、

この日東亜の陸と海とに否定さる。

否定するものは彼等のジャパン。

眇たる東海の國にして

また神の國たる日本なり。

そを告しめしたまふ明津御神なり。

世界の富を壟断するもの、

強豪米英一族の力、

われらの國にて否定さる。

われらの否定は義による。

東亜を東亜にかへせといふのみ。

彼等の搾取ごとく痩せたり。

われらまさに其の爪牙を権かんとす。

われら自ら力を養ひてひとたび起つ、

老若男女みな兵なり。

大敵非をさとするに至るまでわれらは戦ふ。

それゆえに壽をつくりあげたい、世界の歴史を両断する  
 非才いま至らずなどとは言はない、十二月八日を記憶せよ。

この日何かをつくり

何かをのこしたい、

文学の徒の一人としてそれをなし遂げたいのだ。

犀星の戦争詩が〈内側〉の世界から、公なる喜びを「喜び過ぎて言葉をうしなつた瞬間／ひとはじめて我欲をなくし／なんとかして／偉大な喜びをあらはにしたいとあせる」とその真珠湾攻撃の勝利を臣民として詠う時、〈文学の外側〉は、つまり、日本にとつての〈十二月八日〉の意味は詩から、すっかり外されてしまっている。前章で昭和十三年の樽崎宛書簡に「事實、小説は事變とは別に暢気に存在してゐる」とした犀星も〈外側〉の変化が、ことの三年間に自分の〈内側〉に沁み込むのを止めることは出来ない。この真珠湾攻撃の勝利を「自分も臣の一人であり／臣のいのちをまもり／それゆえに壽をつくりあげたい」から、もう躊躇せず、「何かをのこしたい、／文学の徒の一人としてそれをなし遂げたい」と詠うのである。ここに於いて良き「臣民」であることと「文学者」であることは矛盾しない。「國民」の一人としてまさに同時に「國民生活の呼吸づかひ」で、戦争詩を詠むのである。

高村光太郎の詩が最後まで一貫して、日英米開戦の意義と大義を詠むのに対して、犀星は一人の臣民として、公の喜びを感じ、それは私の喜びの表現欲求となる。「自分も臣の一人」であるからと詠

むとき、「公」の自分も「私」の自分も今はひとつなのだという理屈である。「公」事を詠つても、それは「自分」に帰結する。そして、「文学の徒としてそれを成し遂げたい」と訴える。

一方、光太郎の「十二月八日」は、歴史の転換点であるという〈文学の外側〉の意味をも詠い、緊張をもった高揚感に溢れ、國民に、臣民にその責務を問い、覚悟を促す。その内容、表現ともに犀星のいう、「主格は千遍一律の文字を馳駆してそこに議論めいた天上語をつらねる」観念的、思想的、啓蒙的内容を含んだ詩である。

歴史的世界的国力の趨勢を詠み、神国日本の正義を詠う。アングロ・サクソンに搾取され、疲弊した東亜を奪還するという「義」のため、「老若男女みな兵」となつて、「大敵非をさとるに至るまでわれらは戦ふ」と臣民を鼓舞して詠う光太郎は戦時広報の公器となっている。

こうした、〈文学の外側〉と〈内側〉との関係に対する意識の差は、既に昭和一二年の頃から存在した。例えば、犀星が雑誌『文芸懇話会』に属し、その年の九月号を責任編集した時のことである。その号は「室生犀星編輯号——詩についていろいろ——」という特集号であった。伊東静雄、立原道造、草野心平、北川冬彦、三好達治、春山行夫、神西清、また、上司小剣、福士幸次郎、阿部知二、伊藤整、野口米次郎、河井醉茗、北原拍手、百田宗治ら、近代詩から現代詩までの錚々たる面々が、犀星の呼びかけに応えた。ところが、犀星の編集後記によれば、「高村光太郎氏から文芸懇話会の雑誌だから断るといふお返事を見抜いて素直に礼儀を重んじてお

依頼したのであるのに、小生の意志のとどかなかったことが残念に思った」とある。高村光太郎は、この時期、妻智恵子を、九十九里からゼームズ病院に転院させて看病中心の生活に入っている。塑像の製作を幾つか成しただけのある意味、空白期でもあった。しかし、その中で、戦争を予感させる詩をつくっていた。それは。まだ、戦争詩といえるものではなかったが、光太郎は政局を犀星とは違って危惧をもって理解していたと言える。また、前書『室生犀星戦争の詩人・避戦の詩人』の中で、伊藤は、犀星が原稿依頼した雑誌『文芸懇談会』の同人には、「詩人がいなければかりか、文芸国策的、文芸統制的臭気の団体など、その時点——昭和十一年の光太郎にとつては縁遠いものであった」としている。確かに光太郎の戦争詩は知恵子の死後、時局もあるが盛んになって行く。

さらに、光太郎は戦争詩でその名を馳せた時期に自らの詩精神の表明とも言える、その題名も、「詩精神」（昭和一六年四月稿）を八月に『新知識』に発表した。そこには、「詩精神とは事物の中心に直入する精神である。事物の關係を極限の單位に追いつめて、その真相を爬羅刷抉し、更に纏って新を生む精神である。」に始まり、「民族固有の詩精神を孕む時代が興る。明治維新はかかる詩精神に貫かれて遂げられた」「今、世界動乱の中にあって、日本画東亜に持つ使命は、あらゆる唯物的思考を後ろに引き離して遂げられねばならぬ。」この時代に要求されるのが、「詩精神」だと説く。「瑣末主義や、俗情の横溢を閉塞して、敢然と立つ民族の力は此處からのみ養はれる」とある。これが、光太

郎にとつての戦争詩の核心だった。後に光太郎は詩「安愚小伝」の中で、「陛下あやふし」「おぢいさんが、父が母が」「少年の日の家の雲霧が部屋一杯に立ちこめた」「身を捨てるほか今はない」「詩を捨てて詩を書こう」「記録を書こう」と決心したとある。（『真珠湾の日』）光太郎は、既に日本軍が亜細亜へ、南方へ侵行拡大していく中で、「詩を捨て」たのである。「詩」ではなく「記録」が加速し、光太郎は、愛国詩、戦争詩、事変詩の代表となる、翌年、初の芸術院賞を詩「道程」で受賞したのも「道程」が新しい意味を持って時局に評価されたといっている。受賞の報が載った、二日後の『朝日新聞』昭和一七年四月一六日の紙面には、詩人の百田宗治が、「『藝術院』受賞の人々（三）『詩の父高村光太郎』」の題で「私達の先頭に立って時代を導く。私たちに言葉をあたへる。」とし、『道程』の「僕の前に道はない僕のうしろに道は出来る」と言った人が今、「今日『死を滅ぼすのはただ必死あるのみ』と呼喝する。この人において、この言葉は充たされる。私たちはこの人のあとを行く」と記している。

「十二月八日」に示された当時の光太郎の「詩精神」は、犀星の「詩精神」の対極にあるものだと見える。犀星も昭和一八年『神國』の序に「私はかういう時代には進んで史家となり民としてのこまかい、録しておかなければならぬものを書きとどめて置きたい、そして、それをお互の心に読み伏せて置かなければならぬ」と記したが、そこにも（外側）の世界が色濃く沁みこんだ作品は、文中、「神國」ばかりであり、更に言えば、昭和一五年六月四日の

『読売新聞』で、上司小剣が「犀星と清への感銘 『中央公論』の論文と小説」の中で、『戦死』「この作者のもつ特色をもっとも色濃厚に現したもので、標題はありふれた、小説らしいけれど、内容はまるでちがった。俳味」と言はうか。さび」と言はうか、いかにも落ち着いてゐて、元禄時代の名作を讀むうやうな気がした。」と、評しており、『戦死』という、その題から想像される戦争小説とは異なるものであったことが分かる。

次に『美以久佐』の戦争詩「ふたたびその日」と「遠天」にみる、犀星の戦争に対する〈感情〉をみて行きたい。

#### 四、怒りの叙情詩

「ふたたびその日」

「遠天」

この日はつひに何ものものこさず

にくれた、

ひもすがら

この日の人間のころろは

遠き飛行機かすみ

そのまま明日まで持ち越した、

ややありてまたあらはれ

〈略〉

わが庭のそらを過ぎたり

翌日はそのつぎの日にかがやきを

誰びとの乗れるものならん

うち延ばした、

誰びとの心怒りて

我々はいきかへつて

つばさ飛ばさんとするか

あたらしい息づかひをはじめたこ

日もすがらおほぞらにありて

とを知り

憂鬱など吹っ飛ばした

怒り馳りて

みんな頬はまつかだった、

そのをと絶ゆることなし

眼は半分笑ひ

半分は興つてゐた、

そしてそのつぎの日はさらにつぎの

偉大な勝利ういくりかへして

また鶴のやうなつばさをつぎの日に

宛々としてうちつづけた

怒りは怒りを呼びあひ、

〈略〉

艦は龍のごとく

怒濤はひらがな和歌をのせ

やさしいものの怒りをおしひろげた、

あんなに優しくかつたものの

あんなに恐ろしいちからを見せようとは、

やつらはゆめにも知らなかつたであろう、

優しいものはもう怒つて了つた、

怒つたら怒りの解けるまで怒り切るだろう。

怒り怒り飛ばすであろう。

それは何ものも支へきれない怒りであり、

對手を打ち懲らす、

起ち上れないまでに叩きのめす、

嘗てあんなに優しかったものをおもへ、※より続く

そしてその優しさにはぐれた 怒りは怒りを掬ひ

たつらはふたたびその優しさを 輕轆たる鬨ひのくるまを押し寄せる。

美しすぎるものをほしがって

へり降って来る時があるだろう。

その日まで

日は日を次いで

あらがねの怒りとなって戦ふであろう。※

この二つの詩は、戦争の相手国への敵意と日本国臣民の「怒り」を詠んだ詩と言える。昭和一七年の南方侵攻作戦や、四月の米軍機による東京、名古屋、神戸などの初空爆の体験があったかも知れない。いよいよ、戦争が国民生活、ひいては、犀星の個人の生活と生命を脅かす時代の、ある意味においては、戦意昂揚を狙った冗長ではあるが、戦争詩とみることが出来る詩だ。「ふたたびその日」は戦時下の国民の意識を詠い、「遠天」はその一人である犀星の思いを詠んでいる。この国民全体と個人を詠んだ時に、繰り返し使われる言葉が、「怒り」である。当然それは、戦争への闘志でありエネルギーなのだが、それは、生々しい怒りであり、「ふたたびその日」で詠まれる「やさしいもの」つまり、日本の精神、大和魂が、その愛国の心が、今は「怒り」となって拡大して行く、それが「あらがねの怒りとなって」まで、増幅する怒りのエネルギーを「輕轆たる戦ひのくるまを押し寄せる」と描く。この臣民の怒り、増幅し

拡大する戦況に対しての犀星の怒りは、単に敵国を意識した報国愛国の思いだけではないようだ。勇ましい戦争状況が、強制的に映画館にかけられ、早朝のラジオからは愛国詩の朗読が聞こえ、国民のささやかな娯楽にまで統制がかかる(戦時下)という時代を、国民生活の中で感じ取っていた。それは、昭和一五年二月二〇日付『都新聞』「文学の外側(1)・実行する文学」にあるスケッチだ。

最近に人の心のけはしくなつた証拠には省線や電車の中で、他人同士が眼を合わすと忽ち反発した眼の表情に出會わず。しかも、その眼の光にはみんな傷手のやうなものを負うてゐて、此方から眼を放さないかぎり滅多に退いて行かないやうな熾烈さをもつてゐる。意志といふものの方向がまるでくるつてゐるやうに、悲い諍ひを挑んで来る。

国民生活者の視線をもつて戦争詩を詠む立場にあるとした犀星には、こうした国民の変化が痛いまでに察知されたに違いない、一見、愛国心に溢れる、これら二つの戦争詩に書き込まれた国民の「怒り」の矛先は敵国だけではないことを犀星は知っている。それは自分の家の庭の上空を飛んで行く飛行機に向かって「誰びとの心怒りて／つばき飛ばさんとするか」と憤りをあらわにする「遠天」にもある「怒り」である。生々しい感情が、率直に詠われていることに注目したい。こうした犀星の詩の特徴はあの『感情』時代のセンチメンタリズムの激高した姿ともいえよう。犀星の詩に対する持



論は、『抒情小曲集』の自序にある「私は、抒情詩を愛する」であり、これは生涯変わらなかつた。「優しい心」もその自序の中に読者に対する希望として出てくる。しかし、〈戦時下〉の犀星詩にある感情、抒情は、怒りである。

犀星の戦争詩には、こうした自身が思い出したくもない、怒りの抒情が沈潜している。その意味においても、詩の本来の「純正」を求めた犀星はこうした戦時下での詩の創作においてつきまとった〈心のにこり〉が許せなかつたに違いない。

### 五、残された詩・短歌

「よもすがら 八首」より

庭深く

煌々と灯を点けにけり

こよひひと夜の

いのちまもらむため

ひと夜さを

死に絶えゆかむ人ひとり

息づきさこゆ

夜の深きに

「生ける鮎 四首」

山ざとの

橋のたもとに

家ありて

かそかに暮らし

立ててゐるかも

山ざとの

古りたる家に

夏されば

蟬鳴き茶店

いとなみにけり

山ざとの

橋のたもとの

茶の店に

生きたる鮎を

泳がしにけり

歳寒く

ひと夜明けあけたれ森として

生きのびしひとの

欠伸きこゆる

しばらくは

橋のたもとの

古家に

蟬なきしきり

人はあらなくに

さて、『全集詩集』に残つた短歌群は『美以久佐』の「哀笛集」を構成する「一 よもすがら 九首」から八首。「二 生きのびし人 七首」から五首。「三 静か居 六首」は総て削除。そして、「山ざと」の「生ける鮎 一〇首」内の八首。「哀歌」の「街の歌 九首」は総て削除。「あらいそ集」「乏しき炭火 一七首」の内一〇首である。

まず、なぜ、これらの短歌の詩群は残されたのだろうか、

星野晃一の著『室生犀星——幽玄・哀惜の世界——』「四章 犀星短歌の世界」(平成四年九月)によれば、犀星の短歌は同書の時

点で、確認した数、三百九首で、「明治期の短歌が七十一首。大正期の作品はわずかで、」八首、「昭和期の短歌が二百三十と圧倒的に多い」そして、「作品集、全集に収録された短歌はすべて昭和期の作品であり、その意味で明治、大正期の短歌は習作としての扱いをうけている」とある。

昭和期の犀星の短歌数が伸びたことの原因としては、古典文学作品への接近と、昭和一三年に『新万葉集』の刊行が行われ、社会的にも短歌にたいする関心が強くなったことで、発表の機会が増えたことが考えられる。(文学の外側)の要請と、犀星の(内側)の必要の一致ともいえよう。昭和一三年の一月『改造』の「新万葉集全十巻予約募集」の「刊行の辞」には「和歌は『敷島の道』として建国の当初より一貫したわが国風であった。畏くも御歴代皇室の熱烈なる御庇護、御奨励のもとに、世界に誇るべき国民詩として発展してきた。」と和歌を大義と結びつけた上で、「全国民の作歌中から傑作を網羅する『新万葉集』」は「日本文化史上画期的の壮図として、全国的に一大センセーションを惹起した。」とあり、「日本民族の真の相はこの『新万葉集』に凝結してをる。本集こそは未曾有の非常時に絶大の役割を果たすべき有意義な出版」と信じてある。その後には西田幾多郎、廣田弘毅、斎藤茂吉、荒木貞夫、久保田空穂、長谷川如是閑、吉屋信子、小泉信三など、文学、政界、経済、教育界、陸軍高官などの推薦文が続く。犀星の戦争詩「ふたたびその日」に「怒濤はひらがなの和歌をのせ/やさしいものの怒りをおしひろげた」とあるのもこうした背景を考えると表現効果とし

て時流に合ったもので、その効果も大きかったに違いない。これら推薦文を読むと、国民の意識を短歌の投稿を通して「挙国一致」の手段として、国風文化再興、民族意識を高める国策的行事であったことが理解される。

それはまた、短歌形式が時局柄芳しく思われない心情を吐露するカモフラージュになり得る可能性をも含んでいた。詩集『美以久佐』では戦争詩といえるものが、一三作品しかなく、その他は戦時下で起こった社会全体に関わらない、極めて個人的な人生の問題や、自分及び一般の人々の生活、歌物語的創作などがひしめいている。既に紙の供給も制限されたなかでの出版を可能にしたのも、愛国詩人、戦争詩人としての犀星の活躍における信頼性と短歌形式であることを重視した審査があったからとも想像される。

では、作品をみて行こう。「よもすがら」からの四首は、もと九首であった。犀星の妻が昭和一三年一月に脳溢血で倒れた折りの思いを詠ったものである。一首目は、死の床にある妻を決して逝かせまいとする犀星の思いが、夜の闇(死の影)を追い払うように、庭の奥までも「煌々と灯火を点け」たことが詠まれた。二首目は、一息をも逃さず、耳をそばだてて病の妻の看病する犀星の恐れと緊張が伝わる。三首目は、「庭の石仏群」に祈ることも忘れ、妻の生を信じ、と強い覚悟を持って夜の庭の静寂と向き合う犀星の姿が詠われる。四首目は、病の峠を越え、生の世界にもどった妻の欠伸を、生命の証として安堵する犀星が、夜明けの光、朝の静寂のなか描かれている。犀星の抒情は、その自然を見る、寫生的リアリズム

に詩人の感覚と感情が織り込まれて生まれる。俳句によって研ぎ澄まされた彼の〈眼〉がとらえた風景は、庭の深夜から夜明けと変化する時間と景色の中に「生命の哀れ」を詠み込んだ。前書、星野の「4章 犀星短歌の世界」の「いのちの哀れ——哀笛集——」の節で、伊藤信吉と三木サニアの鑑賞を引用、検証した上で、「その哀笛の響きは犀星文学の中かを流れ続けたのであるが、その流れの中に見られる色濃い音色が〈哀惜〉のそれである、といえよう。」と評価している。<sup>註3</sup>

次の四首は、詩集『美以久佐』「生ける鮎」十首の中から残された四首である。おそらくは、犀星の慣れ親しんだ信州、軽井沢への道中の光景だろうか。この四首の世界だけでも、山里の夏から初秋へと季節の運行と、変わり行く人の営みと自然が読み込まれている。そしてここにも、あるのは、静寂、閑寂の空間である。

妻を死の危機に向き合い、詠んだ短歌にも、「外側の世界」戦時下の騒がしさは微塵も感じられない。その世界は静謐とも感じられる俳味に満ちている。つまり、文学の外側にあつた時局に左右されない、「純正」な内なる世界がそこにあつたのである。

## 六、まとめ

このように詩集『美以久佐』の成立背景と詩人室生犀星の戦争詩、及び時局への意識を辿つて来た。人生の最後の決断として、室

生犀星が昭和三七年『室生犀星詩集』において、行った大胆な作品の削除の意味を考えたとき、犀星のいう「心のこり」とは何をさしたのか。本稿での考察でいえることは、全生涯の詩業の決算として、戦争の色の濃い作品ばかりでなく、戦時下の〈文学の外側〉が少しでも、その詩句に現れて「純正」なる抒情を欠いた詩作品を、総て削除したと言える。「心のこり」の削除は、戦争詩を書いた責任からではなく、中野重治の言う、「作品そのものが、それらが内から発しないで外から作られた事への証拠になっているという事実である。」ことを確認したからである。犀星が自身の詩に求める「純正」が、彼の「内側」の揺らぎと混乱によって、壊されたことを、戦時下から、二〇年以上の歳月の経つた後、第一詩集に立ち戻り、削除を重ねた結果、あらわになっていったということであろう。私見だが、犀星は削除し否定したが、本稿の中で、「怒り」の感情を捉えた犀星は、まさにその時点で、「外側」の現実を間直ぐに受け止め、「内」からの真実を詠っていたと思われる。

伊藤信吉はまた、「私は犀星の愛国詩、時局詩、銃後詩をひっきりめた形で戦争詩を先に分類し」、詩を集計したところ、おおよそ、「筑紫日記」九篇、『美以久佐六篇』、『日本美論』十八篇、『余花』十七篇で、合計五十篇ほどとみる・』という。その前に伊藤が記した「犀星はしたたかな〈自己〉を所持する」愛国詩人ということにもなる。」と評し、「室生犀星における詩の犠牲、詩の傷による戦争からの小説の隔離。高村光太郎における詩の虐待による造型の戦争回避。室生犀星と高村光太郎に、私は、こういう〈共通〉の姿勢

を看取することが出来るとおもう。」と書き終えている。

詩集『美以久佐』それ自体の創作過程を考えるならば、犀星のこの戦時下においての、實に生真面目な文学への姿勢に注目したい。昭和七年二月二十六日『読売新聞』の文化欄「けふの生き方——たゆみない勝利への道——」の文章は、余りにも題と乖離している。ここにかかれているのは、今日一日を確かに生きよ、というもので「何よりも良き一日を、一日の全き仕事を、仕事の緊密さを、私は余處眼をしないでつき進んで行きたい。」と記すのだ。「たゆみない勝利」とは、時局とは関わりない、人生の勝利の術を述べている記事である。こうした作物から見えるのは、犀星は確かに「したたかな」詩人であるということだ。

今回、室犀星全集に取められている随筆評論も、出来るだけマイクログラムで確認していった。本稿には使用しなかったものを含めて、まさに中野重治のいう「愚直」といってもいい犀星の文学に対する姿勢、責任感あふれる戦時下を生き抜こうとする必死な犀星の姿があった。精神論では片付けられない戦争詩の作品の評価と理解であるが、この詩人の場合は、彼の詩精神の維持と形成、展開に大きく影響するものだと、改めて感じたものである。犀星詩の奥は深く、小説世界との関係性も、一層研究しなければならないと考ええる。今後は、詩のレトリックや言語へのこだわりだけでなく、俳句、短歌などの表現形式へのこだわりも視野に入れて、犀星詩を探究したい、と考えている。

註

註1

室生犀星の没後、昭和五十三年十一月に冬樹社より、室生朝子監修による三巻本の『定本 室生犀星全詩集』が刊行された。このため、本稿では自主編集した『室生犀星全詩集』と区別すべく、『全詩集』と略して使用した。

註2

中野重治は、昭和四十三年十月、筑摩叢書120『室生犀星』の中で、『感情』時代詩について、「すべての実感を世俗を憚らない思い切った強い表現を持ったもので、その独自の表現は原始人のやうな生氣といふよりの蜜気に満ちたものであった。この詩精神と蜜気ある表現とは、後年詩から散文に移って後も生涯一貫したものであった。」と指摘している。

註3

「よもすがら」八首の初出は、昭和十四年三月の短歌雑誌『むらさき』であるのだが、犀星はその表題を「抒情詩抄」としている。確かにそれは短歌であるのだが、犀星の文芸意識の中において、〈抒情詩〉と同質の詩精神が内包されている形式であることを示している。これは、犀星が、当初師と仰いだ北原白秋が、詩集『思ひ出』と歌集『桐の花』を表裏一体の文芸作品としたことや、その源として、短歌形式をかつて短詩と呼んだ『明星』新詩社の出身であったことを考えれば、新詩社の社則にある「我等の詩は自我のなり」「新しき國歌なり」といった詩精神の継承とも考えられる。

参考文献

1. 室生犀星に関して

室生犀星編『室生犀星全詩集』筑摩書房 昭和三十七年三月刊

室生犀星著『詩集 美以久佐』千歳書房 昭和十八年七月刊

『日本近現代史研究事典』東京堂出版 一九九九年七月

室生犀星著『室生犀星全集』七卷

昭和三十九年九月刊

八卷

昭和四十二年五月刊

別巻二卷 以上新潮社

昭和四十三年一月刊

室生犀星著『室生犀星詩集 自選』岩波文庫

緑六六一―一九八三年八月刊

刊

伊藤信吉著『室生犀星戦争の詩人、避戦の詩人』集英社 二〇〇三年七月刊

中野重治著『室生犀星』筑摩叢書120 筑摩書房 昭和六十年五月刊

星野晃一著『室生犀星―幽遠・哀惜野世界―』明治書院 平成四年十月刊

2. 高村光太郎に関して

高村光太郎著『詩集 記録』龍星閣

昭和十九年三月刊

『高村光太郎全集』三巻増補版

一九九四年十二月刊

『高村光太郎全集』十九巻

一九九六年五月刊

『高村光太郎全集』二十巻

一九九六年七月刊

『高村光太郎全集』別巻 以上筑摩書房

一九九八年四月刊

請川利夫著『高村光太郎の世界』新典社 一九九〇年十二月刊

堀江信男著『高村光太郎論』おうふう 平成八年二月刊

岡田年正著『大東和戦争と高村光太郎』ハート出版 平成二十六年七月刊

なお、本文引用した新聞資料雑誌資料、昭和期の朝日新聞・読売新聞・都新聞、雑誌は、国立国会図書館蔵のマイクロフィルムからの引用である。

その他参考文献

『日本文化総合年表』岩波書店 一九九〇年三月